

# Go Down, Moses の昔がたり

## ——最終章 “Go Down, Moses” の意義——

佐々木 裕 美

### はじめに

長い間人々の間で語られ、語り継がれてきたものを“folklore”とすれば、聖書の物語はまさに、世界最古の“folklore”といえる。特に、文字の読めない南部の黒人たちにとって、キリスト教の教えは、聖書の口承や歌—黒人霊歌—の形で語られた。中でも、彼らにとって最も深い意味を持ったのは、エジプトにおいて奴隷状態に囚われの身となったイスラエルの人々をカナン之地へと導き出したモーセの偉業を語る、出エジプト記である。彼等は、イスラエルの人々の苦難を自分たちの現在の状況と重ね合せ、前者がモーセによって解放を得ることができたように、自分達も信仰によって、いつか解放を得ることができるのだと考えるのである。

本稿で扱う小説 *Go Down, Moses* (1942) の最終章、“Go Down, Moses” は、雑誌に掲載された後、書き直されてこの小説に組み込まれた<sup>1</sup>。“hunting” をモチーフにした、Isaac McCaslin を中心にした男達の物語としてとらえることの多いこの「小説」が、「短編集」ではないかと考えられたのは、この短編“Go Down, Moses” を最終章に組み入れた必然性が十分に理解されなかったからといえる。

その意味で、Cleanth Brooks が、*William Faulkner: the Yoknapatawpha County* において、次のように述べているのは注目に値する。

It might be thought that the ending of “Delta Autumn” with Isaac McCaslin’s final sense of outrage and despair, provide the proper ending for *Go Down, Moses*. Most authors would have been content to end the novel here, and perhaps Faulkner would have been well advised to do so. Instead, however, he elected to end with a short section, the title section of the novel (“Go Down, Moses”), which constitutes a sort of coda to the work as a whole. (Brooks 275)

“hunting” をモチーフにした物語としては、“Delta Autumn” で完結しているのにもかかわらず、なぜこの短編が、しかも小説の題そのものを冠して、この小説の最終章となる必然性があったのかについて考察したい。

その一方法として、先ず、創世記と出エジプト記、さらにマルコ伝にこの短編の源泉を求め、次に、小説 *Go Down, Moses* を黒人女性 Molly を軸にして読み解いてみたい。

### 1. “Go Down, Moses” の源泉としての聖書の物語

先ず、この短編の題となっている「モーセ」と、Molly が孫息子をそう呼び続ける「ベニヤミン」の持つ意味について考えたい。

フォークナーは、インタビューや手紙で、機会あるごとに愛読書として常に旧約聖書をあげて

おり、中でも最も好きなのはアブラハムの話であると述べている<sup>2</sup>。創世記によれば、アブラハムの子孫は、ヨセフによって救われ、エジプトに定住の地を得る。最愛の末の息子ベニヤミンと引き裂かれる際の父ヤコブの嘆きは、彼がベニヤミンをエジプトへ手放すことを決心することによって一転する。ヤコブがベニヤミンをあきらめた時<sup>3</sup>、ヨセフとの再会が果たされるばかりか、再び家族が一つになるのである。それは、ヤコブと12人の息子達にとって、魂の解放を意味する。ヨセフの10人の兄達は、ヨセフに対して行った自分達の過ちを詫びることによって罪から解放され、ヨセフは、兄達の懺悔を赦すことによって裏切られた苦しみから解放される。父ヤコブもまた、ヨセフとベニヤミンを取り戻すことにより、彼らを失った悲しみから解放される。さらに、ヤコブが死を前にして、自分をエジプトでなく故郷の先祖の墓に葬って欲しいと遺言したことも、心に留めておきたい。

創世記に続くのが、出エジプト記<sup>4</sup>である。アブラハムの話と出エジプト記に一貫して流れるテーマは、子供と引き裂かれた悲しみ、兄弟を失った悲しみ、奴隷の苦役からの「自由・解放」であるといえる。この、「苦役からの自由・解放」が、小説 *Go Down, Moses* の底流をなす重要なモチーフとして用いられていることに目を向けるとき、一人の黒人老女、Molly Beauchamp がこの小説の「主人」として浮かび上がる。

そして今一つ、“Molly” が新約聖書の売春婦マグダラのマリアの愛称であることにも、注意を向けておきたい。イエスに7つの悪霊を追い出していただいたこの女性は、信仰によって救われ、神の国の福音を伝え歩くイエスと12人の使徒たちに奉仕をしていたが、復活後、最初にイエスが姿を現わすのは、この女性にであった<sup>5</sup>。

## II. Molly Beauchamp, the Central Figure of *Go Down, Moses*

さて、McCaslin 家の第2世代の物語、“Was” の時代から下って、“Go Down, Moses” は、Beauchamp 家の第5世代の物語である。McCaslin 家の創始者、Carothers McCaslin から数えて実に6世代を経た時代を舞台にしている。“Was” の世界と“Go Down, Moses” の世界とは、3つの世代を隔てているばかりでなく、その文化的様相にも大きな隔たりが見られる。“Was” では“Big house” に閉じ込められていた黒人たちは、今や、Arkansas へ、Chicago へ、そして Indianapolis へと散らばり、かつては Old Ben の支配下にあった深い森も、文明の波に押されて浸食され、後退してしまっている。

“Go Down, Moses” のストーリーは、概ね次のようなものである。

Butch Beauchamp は、Lucas と Molly Beauchamp の長女の息子である。お産の床で母親を亡くし、父親にも捨てられたため、祖母の Molly に引き取られたが、19歳の時に Roth Edmonds の売店に押し入ったのを咎められて農園から追い出され、Jefferson の町にやってくる。彼は、一年間のほとんどを刑務所で過ごした後、脱獄し、数年間行方不明になっている。その彼が、北部 Illinois 州 Joliet で、シカゴの警官を殺した罪により、捕えられ、裁判にかけられて死刑の判決を受ける。

一方、彼の祖母、Molly は、郡の弁護士、Stevens に救いを求めて彼の事務所へやってくる。孫息子に何かが起こっていると言いつ張るのである。Stevens は、すぐに町の新聞社に足を運び、彼が処刑されたことを知る。彼が事務所に戻ると、少女時代を Molly とと

もに過ごしたという白人女性 Miss Worsham が彼を待ち受け、処刑された Butch の遺体を Molly が引き取りたがっていると告げる。

人殺しがひどい罪であり、処刑は、父親の悪い血を受け継いだ Butch が当然受けるべき報いであると考える Stevens に対し、Miss Worsham は、その死体は家に帰らなければならぬと主張する。この主張に戸惑いながら、Stevens は、新聞編集者とともに、この若い黒人の人殺しの死体を Molly のもとへ運ぶために奔走する。彼は、Molly のために立派な棺と花、霊柩車とそれに続くための 2 台の車と運転手まで用意する。人々からの献金を資金に、編集者と自分、さらに農園の Roth Edmonds の援助により、多くの町の人々に Butch の遺体は迎えられる。

そこには、この小説の全体を通して圧倒的な存在感を持ってきた “Uncle Ike, uncle to half county” の姿も、“Uncle Lucas, uncle to the other half county” の姿も見られない。それまで語られてきた Lucas Beauchamp の誇り高き人間としての生き様と Ike McCaslin の高潔さは、まったくなりを潜め、登場するのは、Lucas の妻 Molly, Molly とともに双子の姉妹のようにして育ち、Butch の母親である Molly の最初の娘の名付け親にもなった Miss Worsham<sup>6</sup> と、町の人々のみである。

## II - 1. Molly, Mother to White McCaslin

この小説の最終章、“Go Down, Moses” に至って存在感を増してくるのは Molly である。“Uncle Ike” と、“Uncle Lucas” という二人の存在が、とかく強調されることの多いこの小説において、堂々と彼等の対極にいるのは、“Aunt Molly” 一人である。Molly は、Beauchamp 家ばかりでなく、実は Edmonds 家をも支えてきたのである。今や Edmonds 家の長男として McCaslin 農園を継承した Roth Edmonds は、Molly を母として育ち、Molly から人間としての生き方を教えられた。

...the only mother he, [Roth] Edmonds, ever knew, who had raised him, fed him from her own breast as she was actually doing her own child, who had surrounded him always with care for his physical body and for his spirit too, teaching him his manners, behavior — to be gentle with his inferiors, honorable with his equals, generous to the weak and considerate of the aged, courteous, truthful and brave to all — who had given him, the motherless, without stint or expectation of reward that constant and abiding devotion and love which existed nowhere else in this world for him. (117)

お産の床で命を落とした Zack の妻に代わって、彼女は Roth の母親代わりとなり、自らの息子 Henry に対してと同じに、Roth にも、深い愛情を注ぐ。人間として、誇りを持って生きよと Roth に教えるのは、他ならぬ Molly なのである。しかも、そのことばのなかには、「白人の男として」「一家の長として」ということばは見当たらない。肌の色を超越した Molly の愛情は、少年が自らの白い肌を意識した時の少年をも受け入れる。その翌日から彼女は、少年を、南部社会の中で自らの上に立つ一人の「白人男性」として扱うのである。

But it was too late. The table was set in the kitchen where it always was and Molly stood at the stove drawing the biscuit out as she always stood, but Lucas was not there and here was just one chair, one plate, his glass of milk beside it, the platter heaped with untouched chicken, and even as he sprang back, gasping, for an instant blind as the room rushed and swam, Henry was turning toward the door to go out of it.

....

So he entered his heritage. (113-114)

小説 *Go Down Moses* を一貫して流れるのは、深くて大きい、そしていつでもどんな場合でも変わることはない、Molly の愛である。彼女の人間としての誇りと気高さは、決して Uncle Ike にも Uncle Lucas にも劣るものではない。

## II - 2. Molly, Mother to Black McCaslin

孫息子 Samuel Worsham Beauchamp (Butch) にとって、Molly は、魂の戻るべき場所であった。シカゴでそれまで誰にも語らなかつた自分の本名を、死刑を前にして初めて、彼が明かすとき、彼が自分を育ててくれたのは、父でも母でもない、祖母の Molly であると語るとき、彼は魂の休息と解放を願い、その実現を Molly に求めるのである。

The census-taker wrote rapidly. "Parents."

"Sure. Two. I dont remember them. My grandmother raised me."

"What's her name? Is she still living?"

"I dont know. Mollie Worsham Beauchamp. If she is, she's on Carothers Edmonds' farm seventeen miles from Jefferson, Mississippi. That all?" (370)

Stevens の事務所で Molly が詠唱する、"Roth Edmonds sold my Benjamin. Sold him in Egypt. Pharaoh got him—" (371) は、この短編の底を流れるいわば重要なモチーフとなっている。Molly は自分の血を引くもっとも若い孫息子 Butch を、ヤコブの末息子ベニヤミンになぞらえて、ヤコブがベニヤミンを手放したときの悲しみと重ね合わせているのである。しかも、ベニヤミンを連れていくのは彼の兄達であり、Butch を農園から外の世界へと追放したのもまた、彼と血のつながった「兄」たるべき Roth Edmonds だったのである。

Molly の願いを代弁し、Stevens が町の人々からの寄付を集めやすくするのに貢献する白人女性 Miss Worsham は、父親が残してくれたつぶれかかった家に、たった一人で暮らし、その家で陶磁器に絵を書くことを教えたり、父親の奴隷の一人の子孫である Molly の兄の Hamp Worsham とその女房の助けを借りて鶏や野菜を育てては市場へ出して生計を立てている。短編 "Go Down, Moses" は、この年老いた独身の白人女性と、「10歳の子供ほどの大きさもない」<sup>7</sup> 「しぼんだ信じられないほどに年老いた顔の、小さな黒人の老婆」<sup>8</sup> が、一人の死刑囚の死体を引き取るために町の法と秩序の番人である Gavin Stevens と、町という社会の代表者である郡の新聞社の編集長、Mr. Wilmoth を動かし、すべての住民—"merchant and clerk, proprietor and employee, doctor dentist lawyer and barber" (378)—を巻き込んでいく騒動の物語である。

### Ⅲ. Molly, Mother to All

体面を重んじ、人殺しの孫を持ってしまったことを “terrible” (375) と考える南部の紳士 Stevens に対し、Molly と Miss Worsham は、見知らぬ土地で名もなく葬り去られることこそ “terrible” (375) と考える。

Stevens の事務所での Stevens と Miss Worsham とのやりとりは、どこか滑稽である。なぜわざわざ人殺しの死体を運ばなければならないのか、皆目見当のつかない Stevens が、理由を分からぬまま「家へ連れて帰らなければなりません」と同意し、「ただの棺ではなくちゃんとした棺の用意」を約束させられ、「費用をすべて支払う」という彼女に、支払い可能と思われる10ドルか12ドルで十分だと返事してしまう。すると、彼女は手提げ袋から25ドルをかき集め「十分な費用」を置いていく。電話代を除いて225ドルにのぼる費用を集めるために、彼は広場の限界で寄付を募り、足りない分は編集長と Roth Edmonds と自分とで支払うことにする。すべての手配を終え、おそらく感謝のことはを期待して、Stevens は Miss Worsham に報告に行くが、そこで彼を迎えるのは、Molly、彼女の兄 Hamp と、明るい肌の色をした Hamp の女房の3人が死者を悼む詠唱の連続とそれに合いの手を入れる Miss Worsham の “Oh yes, Lord” (380) の声であり、ここを訪れたことを彼はひどく後悔することになる。そこは、Stevens とは無縁の世界、入りたくても入ることのできない場所、他人が身内の死を悼み、悲しみを分かち合う場だったのである。

白人の大人と子供、男と女、そして50人ほどの黒人男女の見守る中、黒人葬儀屋が汽車から棺を運びだし、花とともに霊柩車に乗せる。Stevens が雇った運転手の運転する車に乗り込んだ Miss Worsham と Molly がそれに続き、さらにそのあとを編集長の車に乗った Stevens と編集長が従っていく。寄付をした者、しなかった者が見守る中、葬列は、町の象徴である南軍兵士の像が立つ記念碑と郡役所の前をぐるりと回り、田舎道へと入っていく。置き去りにされた Stevens と編集長は、車の方向を変え、町に向かう。そして編集長は Stevens に、Molly からこのことを新聞に載せて欲しいと頼まれたことを打ち明け、彼を驚かせる。

“She said ‘Is you gonter put hit in de paper?’”

“What?”

“That’s what I said,” the editor said. “And she said it again: Is you gonter put hit in de paper? I wants hit all in de paper. All of hit.’...I just said, ‘Why, you couldn’t read it, Aunty.’” And she said, ‘Miss Belle will show me whar to look and I can look at hit. You put hit in de paper. All of hit.’” (383)

それで、Stevens は事の次第を漸く理解する。

“Oh,” Stevens said. Yes, he thought. *It doesn’t matter to her now. Since it had to be and she couldn’t stop it, and now that it’s all over and done and finished, she doesn’t care how he died. She just wanted him home, but she wanted him to come home right. She wanted that casket and those flowers and the hearse and she wanted to ride through town behind it in a car.* (383)

Molly は、何より「人間」として誇り高く生きることを望んだ。信仰深い彼女にとっては、生

まれ落ちた境遇がどうであれ、死によってすべての「ひと」は現世の苦しみから解放され、自由になるのである。死者を「迎える」ことは、そのための重要な儀式であったことに、Stevensはやっと気付くのである。

### おわりに

名もなく生まれ、名もなく死んでいく。それが、多くの黒人の運命であった。しかし Molly は、罪を犯し、処刑された孫息子がこの運命を受け入れることだけは強く拒否する。どんな人間であれ、Butch が存在したことを世間が認めることこそが、Molly にとっては彼を奴隷状態から解放するための唯一の手段だったのである。

彼女がそこに求めたものは、彼の魂の解放であった。北部に行って、殺人者となった孫息子ではあっても、彼が死んでしまった今、そんなことは問題ではない。むしろ、それだからこそ、彼を故郷に迎え入れ、町の人々の見守る中を、広場を回って確かに彼は帰ってきたのだと証明し、彼が生まれ、存在し、死んだという事実を世間の人々に知ってもらうために新聞に記事を載せて欲しいと願うのである。

これ以上ない立派な葬儀によって Butch を迎えることのできた Molly の喜びは、たとえそれが死体であっても、ベニヤミンをエジプトに手放しながら、再会を果たすヤコブの喜び、モーセによって奴隷状態からの解放を手にするイスラエルの民の喜び、復活したイエスと出会うマグダラのマリアの喜びと通じる。Molly が、黒人の子供にも白人の子供にも惜しみなく愛を与え、全ての罪を赦し、受入れながらも、やはり自らの魂の解放への強い願いをもち続けていたことをこの短編は、改めて思い起こさせてくれる。

結局、Ike の相続放棄も Lucas の父系 McCaslin としての誇りも、Molly と母系の Edmonds がいたからこそ成り立っていたわけで、これまで語られてきた男達の社会を根底から支えてきたのは、女性だったということになる<sup>9</sup>。しかも、Roth Edmonds には母がなく、彼にとっての母親がモリーであったことを考える時、モリーの存在感はさらに増すことになる。この小説の舞台を真に支えていたのは、黒人女性 Molly Beauchamp ただ一人に象徴されるからである。

だからこそ、この小説の巻頭の献辞が Mammy Caroline Barr に対してなされ、短編、“Go Down, Moses” が最終章として組み込まれたことに十分納得が行くのである。今一度この小説の第1ページに戻って、この稿を終えたい。

To Mammy  
CAROLINE BARR  
Mississippi  
[ 1840-1940 ]

Who was born in slavery and who  
gave my family a fidelity without  
stint or calculation of recompense  
and to my childhood an immeasur-  
able devotion and love

本稿は、日本英文学会第50回中部支部大会（1998年10月24日 名古屋大学）での口頭発表に基づく。

注

<sup>1</sup> “Go Down, Moses” は、1940年7月24日、*Saturday Evening Post* 社に送られ、1941年1月25日の *Collier's*, CV II号に短編として掲載された。

<sup>2</sup> Q. Who do you like best in the Old Testament?

A. Oh the story of Abraham. I like all of it. They were scoundrels and blackguards and doing the best they could, just like people do now. I like most it. (*F in U* 285-286)

また、創世記におけるアブラハムとベニヤミンの話は次のようなものである。

アブラハムの息子イサクの次男で長子権を手にするヤコブが、最愛の妻ラケルとの間に年老いてから漸く授かったのが、ヨセフとベニヤミンであり、ベニヤミンは、ヤコブの12人の息子の末っ子である。ヨセフを失ったと信じていたヤコブは、残されたベニヤミンをことのほか可愛がる。一方、父からヨセフに注がれる愛情に嫉妬した兄たちによってエジプトに売られたヨセフは、エジプト王ファラオの信頼を得て、重用され、王に代わって国を治める。大豊作のあとに続く大飢饉の間にも、ヨセフの治めるエジプトには食物があふれていた。カナン地方も飢饉に襲われ、ヤコブは、ヨセフの10人の兄達を穀物を買いにエジプトに行かせるが、危険を恐れて、ヨセフの弟ベニヤミンだけは同行させなかった。ヨセフは、兄達に食べ物に分け与え、ベニヤミンを連れてくることを要求する。ベニヤミンとの別れを悲しむ父を説得し、兄達がベニヤミンを伴って再び食料を求めてエジプトのヨセフのもとへ行くと、ヨセフは彼等を厚くもてなした後、ベニヤミンの荷物に潜ませた銀の杯を使って、兄達を責め立て、自分をエジプトに売った罪を告白させ、懺悔させる。そして、互いに赦し合ったあと、兄弟を父とともにエジプトへ呼び寄せる。総数70に及ぶヤコブの家族は、エジプトの最も良い土地を与えられ、エジプト人の厭う羊飼いとなる。147年の生涯を終えるにあたってヤコブは、息子ヨセフに次のように遺言する。

…「もし、お前がわたしの願いを聞いてくれるなら、…どうか、わたしをこのエジプトには葬らないでくれ。わたしが先祖たちと共に眠りについたなら、わたしをエジプトから運び出して、先祖たちの墓に葬ってほしい。」（創世記47.29-30）

<sup>3</sup> 「…どうか、全能の神がその人の前でお前たちに憐れみを施し、もう一人の兄弟と、このベニヤミンを返してくださいますように。このわたしがどうしても子供を失わねばならないのなら、失ってもよい。」（創世記43.14.）

<sup>4</sup> ヤコブの死後、祝福を受けたイスラエルの民は、数を増し、強大になっていく。ヨセフの恩を知らない新しい王がエジプトを支配するようになり、増加し、強力になりすぎたイスラエルの民を恐れるようになる。そこで、エジプト人は、イスラエルの人々に強制労働をさせ、重労働を課して虐待する。それでも増え続ける彼等に、エジプト王はヘブライ人に生まれた男児を皆殺害させる命令を下す。その中で、ファラオの王女によって助けられたのがモーセである。成人したモーセは、神によってエジプトのファラオのもとに遣わされ、今や、青年男子だけでも60万を数えるほどに増えたイスラエルの人々を、「奴隷の家、エジプト」から導き出す。

<sup>5</sup> マルコによる福音書16章9節

<sup>6</sup> *Intruder in the Dust* (1948) において、Miss Habersham として再登場する彼女と、Lucas の妻 Molly との関係は、次のように紹介されている。

...old Molly, Lucas' wife, who had been the daughter of one of old Doctor Habersham's Miss Habersham's grandfather's, slaves, she and Miss Habersham the same age, born in the same week and both suckled at Molly's mother's breast and

grown up together almost inextricably like sisters, like twins, sleeping in the same room, the white girl in the bed, the Negro girl on a cot at the foot of it almost until Molly and Lucas married, and Miss Habersham had stood up in the Negro church as godmother to Molly's first child. (ID 87)

<sup>7</sup>Stevens thought: *Good Lord, she's not as big as a ten-year-old child.* (379)

<sup>8</sup>a little old negro woman with a shrunken, incredibly old face beneath a white headcloth and a black straw hat which would have fitted a child. (371)

<sup>9</sup>It may seem odd to have this book close on an episode in which Molly and her white counterpart, Miss Worsham, dominate the action, especially when one remembers how much of the book has to do with Lucas' striving with his fate and with Isaac McCaslin's initiation, self-discipline, and attempted expiation. But the actions of Lucas and Ike are unthinkable except against the background of such a community, and it is the women who most typically embody and express its claims. (Brooks 278)

#### 引用文献

- Brooks, Cleanth. *William Faulkner: The Yoknapatawpha County*. 1963. New Haven and London: Yale UP, 1966.
- Faulkner, William. *Go Down, Moses*. 1942. New York: Vintage, 1973.
- . *Intruder in the Dust*. New York: Modern Library, 1948.
- Gwynn, Frederick L., Blotner, Joseph L., ed. *Faulkner in the University*. 1959. Charlottesville and London: UP of Virginia, 1995.